

ローマ人への手紙2章1-16節 「人の裁きと神の裁き」

1A 他人をさばく者 1-5

1B 自分自身へのさばき 1-2

2B 免れない御怒り 3-5

2A 行いに応じた報い 6-11

1B 一人ひとりに対する報い 6-8

2B えこひいきのない神 9-11

3A 律法を行わない者 12-16

1B 律法を持っている者 12-13

2B 良心という律法 14-16

本文

ローマ人への手紙 2 章を開いてください。私たちは今日、午前にて前半部分を、午後後半部分を一節ずつ見ていきます。今朝は、1 節から 16 節までを見ていきますが、説教題は、「人の裁きと神の裁き」です。人が物事を判断する物差しが、表面的なもので真理に基づいていないが、神は公平であり、隠れたところも含めて裁かれる方だということです。先週は、2 章 5 節に注目して、そのことをじっくりと見ていきましたが、今朝は、一節ずつじっくりと見て行って、パウロが真剣に論じているところを見ていきましょう。

1A 他人をさばく者 1-5

1B 自分自身へのさばき 1-2

¹ ですから、すべて他人をさばく者よ、あなたに弁解の余地はありません。あなたは他人をさばくことで、自分自身にさばきを下しています。さばくあなたが同じことを行っているからです。

「ですから」と言っていますから、1 章からそのまま続いています。パウロは、不義と不敬虔の中に生きている人々が、神の怒りを受ける話をしました。「29 彼らは、あらゆる不義、悪、貪欲、悪意に満ち、ねたみ、殺意、争い、欺き、悪巧みにまみれています。また彼らは陰口を言い、30 人を中傷し、神を憎み、人を侮り、高ぶり、大言壮語し、悪事を企み、親に逆らい、31 浅はかで、不誠実で、情け知らずで、無慈悲です。」このように語ると、「これは、私には当てはまらない」とみなし、そして、「ああ、あのような人たちのことね」と他人行儀にする姿に対して、パウロは福音の真理に基づく光を当てます。確かに、そのような人たちは、人間的には、他の人々より道徳的な生活をしているのかもしれませんが。

そして、このような自分自身に対する、「自分は、神の怒りを受けるような人間ではない。」とす

る自己評価が、イエス・キリストが自分の罪のために十字架にかかって死なれた、そして三日目によみがえられたとする良き知らせに、耳を閉ざす理由になっています。伝道者ビリー・グラハムは、「十字架を語ると、人々をつまずかせる。なぜなら、十字架は、あなたは罪人だ、と教えているからだ。」と言いました。

それで、パウロはいかに、自分を評価する判断基準が頼りにならないものかを明らかにしているのです。まず、「**弁解の余地はありません**」と言っていますね。ロマ1章20節でも、「**弁解の余地はない**」と言っていますが、その時は、「私は神を知らないから、神の怒りを受ける」ということはないでしょう、という弁解です。ここでは、「私は、こんな悪いこと、やっていないから、神の怒りを受けることはないでしょう。」という弁解です。

そこで、「あなたは他人をさばくことで、自分自身にさばきを下しています。さばくあなたが同じことを行っているからです。」と言っています。イエス様も、「マタ7:2 あなたがたは、自分がさばく、そのさばきでさばかれ、自分が量るその秤で量り与えられるのです。」と言われました。人には、悪い行いに対して、同意するという心があります。その時はその行為を行っていないからかもしれないけれども、その行っていることについて自分も喜んで見えています。1章32節にも、「それを行う者たちに心から同意もしているのです。」と言っていました。

ですから、たとえその時は行っていなくとも、状況に少し変化を加えると、実は自分自身もそのことを行っていることに気づきます。前回お話したように、ダビデが自分の姦淫の罪をナタンに指摘された時がそうでした。ナタンは、貧しい人が一匹のメスの子羊を飼っていて、多くの羊と牛を持っている、富んでいる人がいました。旅人が飛んでいる人のところに訪れたので、自分の羊や牛から取って調理するのを惜しみ、その貧しい人の雌の子羊を奪い取って調理したという喩えを話しました。ダビデは、「Ⅱサム12:5 主は生きておられる。そんなことをした男は死に値する。」と言ったのです。ナタンは、「あなたがその男です。」と指摘します。ダビデは、憐れみ深い人です。その話には我慢がならなかったのでしょう。けれども、同時に自分の罪を覆い隠していました。人は、自分が罪を犯している時に、同じ罪を犯している人がいると、かえって強く断罪するものです。律法主義的な人も、自分ができていないから、かえって掟や規則を人々に強要することもあります。

² そのようなことを行う者たちの上に、真理に基づいて神のさばきが下ることを、私たちは知っています。

人の判断基準は、限られたものから見ているので表面的です。そして、自分自身には当てはめられないように都合よく出来ています。そのため、その判断が「**真理に基づいて**」いないことが大半です。それはあたかも、コップの中の泥水のようなものです。普段は、泥が底に沈んでいるのですが、何か刺激を加えられると全体を泥の色にします。それで自分はきよい水だと思い込んでしまうのです。

そこで状況を変えたり、立場を変えたりすると、あたかも泥をかき回すようになって、自分は、きれいだと思っていたものが濁っていると分かるのです。けれども、神は私たちの心の底にある泥も含めた、真理に基づく裁きを行われます。詩篇 96 篇 13 節には、「主は、義をもって世界を、その真実をもって諸国の民をさばかれる。」とあります。

2B 免れない御怒り 3-5

³ そのようなことを行う者たちをさばきながら、同じことを行っている者よ、あなたは神のさばきを免れるとも思っているのですか。

先ほど言いましたように、他人事のように不義を見ている人は、自分はそのようなことを行っていないから、神のさばきを受けることはないと思っています。けれども、免れることはできない、同じことを行っているからだ、ということです。

⁴ それとも、神のいつくしみ深さがあなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かないつくしみと忍耐と寛容を軽んじているのですか。⁵ あなたは、頑なで悔い改める心がないために、神の正しいさばきが現れる御怒りの日の怒りを、自分のために蓄えています。

ここは、前回、じっくりと見た箇所ですね。神は、慈しみ深い方です。とても良い方です。へりくだって悔い改める者に、豊かな憐れみを注がれ、恵みをもって救ってくださいます。そして罪を犯している者たちにも、悔い改めることを待っておられて、忍耐と寛容を働かせておられます。だから、イエス様が山上の説教で始めた言葉が、「マタ 5:3 心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。」でありました。

ところが、自分が正しいと思っている時に、自分が悔い改める必要を感じないので、その慈しみ深さを軽んじることになります。そうして、本当は自分自身も同じ罪を犯しているのに、それに対して悔いて、悲しんで、悔い改めることができません。それだから、自分自身で神の怒りを受けるための不義を蓄えているのです。大事なのは、神の裁きは、神が進んで行っているのではないということです。「自分のために蓄えています」とあるように、神は強いられて裁かざるを得ないので、自らが頑なになって、拒んでいるから裁かれます。「ヨハ 3:17-18 神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。御子を信じる者はさばかれない。信じない者はすでにさばかれている。神のひとり子の名を信じなかったからである。」

パウロは、「神の正しいさばきが現れる御怒りの日」について語っています。神は、罪に対して途方もない忍耐と寛容を尽くされますが、それは罪を容認していることでは決してありません。罪に対して神が何も行っておられないように見えるので、それで「神は不正に対して何も行うことができないのか？」とったり、酷い時は、「神は罪を認めておられる」と考えてしまうのです。けれども、

神は必ず裁かれます。その時が定められています。

聖書を見れば、「主の日」という言葉が数多く出てきます。「ヨエル 1:15 ああ、その日よ。主の日は近い。全能者による破壊の日として、その日は来る。」「Ⅰテサ 5:2-3 主の日は、盗人が夜やって来るように来ることを、あなたがた自身よく知っているからです。人々が「平和だ、安全だ」と言っているとき、妊婦に産みの苦しみが臨むように、突然の破滅が彼らを襲います。それを逃れることは決してできません。」ペテロは第二の手紙で、その日が遅いように感じるけれども、それは神が忍耐しておられるからだと言っています。「Ⅱペテ 3:9 主は、ある人たちが遅れていると思うように、約束したことを遅らせているのではなく、あなたがたに対して忍耐しておられるのです。だれも滅びることがなく、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」神は、私たちをご自分の正しさのゆえに、裁かなければいけないところから救われるように、熱心に悔い改める者たちを待っておられるのです。

2A 行いに応じた報い 6-11

そこでパウロは、神は、真理に基づいて、正しくさばかれる物差しを持っておられることを教えます。人は、色眼鏡で物事を見て、自分に都合のよいように見ますが、神は正しく見ておられます。

1B 一人ひとりに対する報い 6-8

⁶ 神は、一人ひとり、その人の行いに応じて報いられます。⁷ 忍耐をもって善を行い、栄光と誉れと朽ちないものを求める者には、永遠のいのちを与え、⁸ 利己的な思いから真理に従わず、不義に従う者には、怒りと憤りを下されます。

永遠のいのちの約束を受けている者の特徴は、忍耐して善を行っています。それは将来に、栄光と誉れが与えられることを知っているからです。また、それは朽ちることのない天の宝として蓄えられていることも知っています。その反対に、神の怒りと憤りを受ける者は、第一に利己的です。正しく生きている人であっても、それは自分の義を立てるためという利己的なものです。それゆえに、真理には従えません。パリサイ人がイエスにある真理に到達できず、不義の行いをしたのと同じです。その行き着くところは、神の怒りと憤りです。

ここで大事なのは、「一人ひとり」というところにあります。各々が報いを受けます。エゼキエル書には、父の正しい行いによって子が義とされることはないし、逆に父が罪を犯しているからといって、子が罪に定められることはない。「罪を犯したたましいが死ぬ」と言っています(18:20)。自分が例えばクリスチャン家庭に生まれ育ったから、ということは理由になりません。教会に属しているということさえ、理由になりません。自分自身がどうなのか？ということで問われます。

そしてもう一つ大事なのは、「その人の行いに応じて」というところです。人は見かけや印象で判

断してしまいます。しかし、行いを神は正しく見ておられるのです。私は、フェイスブックで、三人の女性の写真を掲げ、戸惑っている内容を書き記しました。それぞれ、政治家、国際政治の学者、そしてイスラム思想の研究者です。発言や、その書かれていることがとても良いのでフォローしているのですが、しばしば、三人とも「美人」ということが話題に上がるのです。私は、啞然としてしまいました。政治や思想のことを考えている時に、そんな、話している人の顔なんか見ている暇はない！と思ったのです。ところが、ある人が教えてくれました。美人アナウンサーなどが出て来る時、男の人は内容を半分聞いていない、というのが統計か何かで出て来るのだそうです。今は容姿について話しましたが、学歴、出自、年齢、民族や国、性別、いろいろなものでその人の価値を推し量ろうとします。しかし、神はそういったもので推し量りません。あくまでも、「行い」です。

2B えこひいきのない神 9-11

⁹ 悪を行うすべての者の上には、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、苦難と苦悩が下り、¹⁰ 善を行うすべての者には、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、栄光と誉れと平和が与えられます。

神の取り扱いについて、当時、大きな部分を占めていたのが「ユダヤ人」と、そうではない人たち、異邦人です。ユダヤ人は、アブラハムの子孫で、契約の民なので、そのまま神の国に入ることができるとみなしました。ギリシア人などの異邦人は、それゆえ、ユダヤ教に改宗することによってのみ、救われるとしました。しかしパウロは、今、話したように、各々がその行いに応じて報いが決まるのであって、そこにユダヤ人とギリシア人の区別はないとしているのです。これは、パウロが旧約聖書をないがしろにしているのではなく、まさにそこに書かれてあるところで、イスラエル人とて、悪いことを行っている者は裁かれ、滅ぼされています。異邦人であっても、主なる神を恐れている人は、例えばラハブ、ルツなどがいますが、イスラエル人の中に住み、神のものとされました。

ただここで、順番があります。「ユダヤ人をはじめギリシア人にも」ということです。これは、神の真理について、そのことばが初めに与えられた選びの民だからです。パウロは前に、「福音は、ユダヤ人をはじめギリシア人にも」と言いました(1:16)。福音が届けられたのは、まずユダヤ人です。それからギリシア人です。そして、神の厳しさもユダヤ人が先に与えられました。旧約聖書を見れば、ユダヤ人が裁きを受けているのを見ますが、それは始めに知識が与えられたからであり、ユダヤ人だけが裁かれていると他人事にできないということです。聖書を読んで、時々、「イスラエルの民はどうしてこんなに頑なのだろうか。」として、他人事のように話す人たちがいますが、まさに、ここの箇所を読んでほしいですね、「それは、あなたが頑なのを教えているのだよ」と。

¹¹ 神にはえこひいきがないからです。

これまで話した、見かけでの判断はなく、えこひいきせず裁かれるのだ、ということです。申命記で、モーセが、神がいかにか正しい裁判官であられるかを語っています。「申 10:17-18 **あなたがた**

の神、【主】は神の神、主の主、偉大で力があり、恐ろしい神。えこひいきをせず、賄賂を取らず、みなしごや、やもめのためにさばきを行い、寄留者を愛して、これに食物と衣服を与えられる。」人は、力のある人、自分に益をもたらす人には良くしてあげ、見返りがまず見込めない人にはあしらす傾向があります。えこひいきがあり、心で差別があります。けれども、神はそのようなことをなさらない方です。

ですから、終わりの日に神の裁きの御座に出る時に、自分をこの方に印象付けることはできません。黙示録 20 章の白い大きな御座においては、行いの書が開かれるとありますが、その場で、「私は、これこれの人々といっしょにいました。」とか、「私の学歴はこれこれです」とか、「私は、こういった業績を積みました。」とか、何も言えないのです。ただ、行ったことのみなのです。しかも、真理に基づいてのことであり、隠れたこと、心の動機に至るまでの行いにしただがって裁かれます。

3A 律法を行わない者 12-16

1B 律法を持っている者 12-13

¹² 律法なしに罪を犯した者はみな、律法なしに滅び、律法の下にあって罪を犯した者はみな、律法によってさばかれます。¹³ なぜなら、律法を聞く者が神の前に正しいのではなく、律法を行う者が義と認められるからです。

パウロは、罪を犯していることについて話しています。罪を犯すとは、与えられた掟に違反しているから罪というのですが、神の掟、神の言われていることに違反しているから罪を犯しています。ユダヤ人には、聖書という、すでに書かれている律法があり、それに違反していることが罪とみなされます。では、異邦人はどうなるのか？それは次の 14 節以降で話します。結論からいうと、律法がなくても、罪を犯していることが分かり、それによって滅ぶのだとしています。

ここ 13 節では、律法を持っているユダヤ人に対して語っています。ユダヤ人の過ちは、律法を聞いているからそれで義とされるのだ、義の報いを受けるのだと思い込んでしまうことです。はっきりと、律法の中に、これを行えばいのちを得るとあるのに、聞いているだけで義を得ていると思ってしまうのです。これは、私たち聖書をいつも聞いている者たちも、気をつけないといけないことです。聖書を多く知り、神のことばを聞いていたら、それで自分は大丈夫だと思ってしまう。いえ、聞いて、応答したら初めて、それが信仰と呼ばれるものであり、義と認められるのです。イエスは、「実によって見分けなさい。」と言われました(マタイ 7:16)。

2B 良心という律法 14-16

¹⁴ 律法を持たない異邦人が、生まれつきのままで律法の命じることを行う場合は、律法を持たなくても、彼ら自身が自分に対する律法なのです。¹⁵ 彼らは、律法の命じる行いが自分の心に記されていることを示しています。彼らの良心も証ししていて、彼らの心の思いは互いに責め合ったり、ま

た弁明し合ったりさえするのです。

異邦人が、神からの律法がないのに、どうやって裁かれるのか？それは、「彼ら自身」と言っていますが、つまり、心にある「良心」です。神は、被造物によってご自身をはっきりと現すことを、1章で学びました。ここでは、良心によって神がおられることを知ることができます。良心は、何が正しく間違っているのかを知らせる大事なものです。これをよく考えてみてください、どうして、だれからも教えられないことなく、これが間違っていると分かるのでしょうか？教育で初めて分かるという人がいますが、そんな表面的なものではないですね、良心というのは、何も教えられなくとも、分かる者です。この前話しましたように、未開人で人を殺すことが文化になっているところで、殺す人たちは白昼堂々とやらず、夜にこっそりとやるのです。良心があって、殺人はいけないことだと分かっているのです。良心に、神がおられることが明らかにされているのです。

ですから、異邦人がどのようにして裁かれるのか？聖書を知らないのに、どうやって裁かれるのか？という答えには、「与えられている良心にしたがって」ということでしょう。自分がこれまで、自分が正しいと知っていることに従って生きてきたか？ということが問われるのです。自分がこう生きるべきだと思っているところで、そうではない自分がいるという落差があれば、その基準に従って裁かれます。

パウロは、「彼らの心の思いは互いに責め合ったり、また弁明し合ったりさえする」と言っていますが、当時だけでなく、今もよくある光景ですね。なぜ互いに責め合うのか？それは、これが必ず正しいとしている基準があるからです。誰かをその基準で責めた時に、責められた者が「ちょっと待て！あなた、そんなこと言っているけれども、あなた自身がそれを行っているのか？」と責め返します。そして相手は弁明します。こうやって、そこに見えてくるのは神ご自身なのです。神が、それぞれに与えられている良心にしたがって、彼らが自分たちの良心にある基準に到達していないことを、証しておられるのです。そ

¹⁶ 私の福音によれば、神のさばきは、神がキリスト・イエスによって、人々の隠された事柄をさばかれるその日に行われるのです。

これが、結論です。他人をさばく人に対する結論です。「私の福音」とパウロは言っていますが、パウロ個人が良き知らせとして知っていることということです。それは、人にとって正しいものではなく、神にとって正しいとされていることに従って裁かれるのだ、ということです。

まず、「神がキリスト・イエスによって」と言っています。キリスト・イエスが、神の正しさを証しておられました。パリサイ人や律法学者は、人には正しいと見られていましたが、例えば、兄弟に馬鹿といったら、すでに殺人の罪を犯しているのと同じなのだといエス様は言われました。イエス様

は、敵を愛し、敵のために祝福しなさい、とも言われました。キリスト・イエスによって、神の正しさが明らかにされて、この方が正しさの基準なのです。

そして、「人々の隠された事柄をさばかれるその日」とパウロは言っています。ここが結論です。人の判断の基準は、いかにちっぽけで、曲がったものでさえあるか、ということです。エレミヤは、「17:9 人の心は何よりもねじ曲がっている。それは癒しがたい。だれが、それを知り尽くすことができるだろうか。」と言いました。自分が知ることができないほど、ねじ曲がってしまっているということです。これが人間の裁きの基準です。それに対して、神は、心の思いの隅々まで、その深みまで知り尽くしておられるので、正しくさばくことができます。「ヘブ 4:13 神の御前にあらわでない被造物はありません。神の目にはすべてが裸であり、さらけ出されています。この神に対して、私たちは申し開きをするのです。」

どれほど私たちが、自分たちの裁きの世界に生きていることでしょうか！ああ言い、こう言い、それで世界を全て知ったかのように話します。そこには、閉塞感しかありません。互いに責め、互いに弁明する世界です。そして、分かったかのように神にさえ、あなたは不公平であるとします。根本も問題は、「自分が正しい」とする呪縛の中にあるからです。いいえ、その反対です！正しいのは神のみなのです。この方を認めることなのです。この方こそがすべての隠されたことも明らかにし、誤りなく裁くことができるのです。

なので、私たちは安心できます。これが、福音です。私たちは他者を裁く必要はありません。分かろうとする必要もありません。実は自分自身を裁く必要さえないのです。自分で自分をどうやって正しく裁けるのでしょうか？それはまるで、髪の毛を掴んで空中に浮かぼうとするような試みです。自分についてすべてを知っている神のみが、正しくさばけます。すべての人が、ただ神を見上げ、イエス・キリストにあってなされたことを仰ぎ見るならば、そこには喜びと平安があります。